

アイヌ口承文学に見られる表現omommomoに関する一考察

— 沙流地方の英雄叙事詩を中心に —

遠藤志保

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 語釈と先行研究
 - (1) テキストの注や辞書における説明
 - (2) Philippi (1979)
 - (3) 田村 (1998)
 - (4) 荻原 (2010)
 - 3 鍋沢元蔵のテキストにおけるomommomoの使用場面
 - 4 鍋沢元蔵のテキストにおけるomommomoの用法
 - 5 英雄叙事詩・聖伝におけるomommomoの使用
 - 6 神謡における使用 (1)
 - 7 神謡における使用 (2) 『アイヌ神謡集』におけるomommomo
 - 8 散文説話における使用
 - 9 おわりに

Key Words アイヌ文学 (Ainu oral literature)、英雄叙事詩 (Heroic epic)、省略 (Ellipsis)、くりかえし (Repetition)、常套表現 (Formula)

1 はじめに

アイヌ英雄叙事詩のみならず、口承文学では同じ表現や内容がくりかえし語られるということが見られ、それが語り口の特徴ともなっている。たとえば、日本昔話の特徴のひとつとして「くり返しが多く、語句の表現から一話の構成にまでそれが愛されている」(稲田他1994: 294-295)と述べられているように、特に書かれた文学との違いとして、くりかえしを口承文学における特徴のひとつとして論じる場合は少なくない。

一方で、アイヌ口承文学のテキストにおいては、同じ表現をそのままくりかえすばかりではなく、常套表現を用いて語られる場面や描写が、しばしば省略されることがあることに気づく。こうした省略もまた、くりかえしにかかわる表現の延長上にあると考えられる⁽¹⁾が、口承文学における省略表現に関する記述はまだ少ない。

そこで本稿では、アイヌ口承文学、なかでもアイヌ英雄叙事詩においてしばしば使われるomommomo「～を詳しく述べる、かくかくしかじかである」という語につ

いて、特に沙流地方の伝承者であった鍋沢元蔵のテキストを中心に使用場面・使用方法の分類を行い、先行研究において指摘されてきたomommomoの使用場面の範囲についても、再検討する。

2 語釈と先行研究

(1) テキストの注や辞書における説明

本稿でとりあげるomommomoという語の説明としては、金田一(1923: 99)に「一々につまびらかに叙説する意。省筆するときという慣用語」とあるのが、記述としては古い。これは口承文芸テキストにおける注釈としてつけられたものだが、金田一(1923)以後もomommomoの説明としては、口承文芸テキストにおける注釈、ならびに辞書類における語釈が中心であり、詳しい論考は少ない。そこでは、金田一の説明にあるように、語義としては「つまびらかに叙説する」であり、「省筆」にあたって用いる「慣用語」すなわち常套表現であるという説明にとどまることが多く、それ以上の詳

遠藤志保：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 口承文学そのものではないが、古事記における表現について論じた戸谷(2000)では、「語句や事柄を繰返し記述する場合、後出の繰返し表現を部分的に省略する手法」として、省略を「〈反復繰返し〉にみられる表現の特徴」として位置づけている(戸谷2000: 19)。

細な分析は少ない。

たとえば、口承文芸テキストの注釈としては、久保寺(1977:667)では「伝承者はこの語を用いながら、実際には詳細には述べず、かえって省略することが多い」のように記している。

辞典を見ると、久保寺逸彦が「omommomo 一々詳しく話す,かどかどはしよらずに縷述する.丁寧に詳述す」「yukar」にては前に叙べたことを再び絮説することを省く時 aomommomo『我絮説す』といつて省略する(久保寺 1992:187)と説明している。『千歳方言辞典』(中川 1995)では「～を詳しく述べる;詳しく描写しなければならないような場面を、アオモンモモ a=omommomo『私は詳しく述べる』とだけ言って省略してしまう用法がある(中川 1995:130)とある。いずれも、語義としては「詳述する」という意味だが、この語を用いることによって、丁寧に詳細な表現を「省略」するものだという説明が、omommomoという語に対する解釈である。

こうした「省略」するための用法であることから、萱野(2002:182)では「さつと言う,略して言う」という和訳を付けており、「『さつと言う』『ここで省略して話を前へ進める』という意味になる場合が多い」という説明をさらにつけている。

(2) Philippi (1979)

Philippi (1979:38-39)では、アイヌの韻文学(epis songs)において用いられる常套表現(formula)の説明のなかで、特殊な常套表現として、このomommomoをあげている。

これは、聞き手がすでによく知っている常套表現(formula)を省略したいときに語られる常套表現であり、語り手が物語のスピードアップを図りたいときに非常に便利な常套表現であるとも述べられている。

omommomoの意味・使い方についての指摘自体は、金田一・久保寺らと変わらないが、この語を用いて常套表現を省略することによって語りのスピードアップにつながるという指摘がなされている点は興味深い。

(3) 田村 (1998)

田村すゞ子による『アイヌ語音声資料』11巻は英雄叙事詩のテキストであるが、その注釈は非常に詳しく、omommomoについての説明(田村 1998:31)も詳細なものである。

そこには、訳語として「省略」と「詳述」とがあげられてきたことに触れ、「こう言ったあと略してしまうのは『くわしく述べるようなことがあるのだ』ということを知らせて、それをこと細かに述べたことにする、とい

う、語り手と聞き手との間の、習慣化された、いわば約束事だ」という田村自身の解釈をあげている。

また、意味としてはそのように「…をくわしく、こと細かに述べる」であるが、このように「くわしく述べる」こと自体に重点があるのではなく「むしろその話題についてはもうこれ以上述べないで、次の話題に移ってしまうとか、終わってしまうとかのときに多く使われる」と述べている。「その話題についてはもうこれ以上述べない」という記述は、Philippiが述べたような物語のスピードアップを目的とした使い方を指すと考えられるが、そのみならず「次の話題に移ってしまう」と、話題の転換にかかわる機能もあることを指摘している点は重要であろう。このように物語のスピードアップに必ずしも寄与しないという点では、金田一(1931)所収の「虎杖丸の曲」における使い方について紹介している部分での、「この句のあとに、84行にわたって詳述のつづいている箇所」があるために、omommomoが使われても「必ずしも詳しく述べない」わけではないという説明も同様ではある。だが、こちらではスピードアップ以外のどのような機能をomommomoが有しているのかについての説明はない。

また、使用場面としては、これまでにあったような常套表現の省略のみならず、「同じ事柄が繰り返されるときに、2回目以降、詳述を省略するとき」というくりかえしにおいて使う場合があるとあげ、さらには「一つの叙事詩の冒頭の部分にすでに出ている例さえある」と、omommomoが使用される場面いくつかのパターンがあることを示唆している。

最後に、散文説話においてはiyomonmomoという語として、「訪問者が来たときに取り次ぎの女性が『これこれこういうふうな人が来ています』と告げる言葉を聞いた家の主が、『こまごまと言わずに、入りたくて来た人は家に入れなさい』というような意味」で常套的に使われると説明している。

(4) 荻原 (2010)

荻原(2010)はomommomoという語の使い方に関する、最初の本格的な論文である。この論文では、鍋沢ワカルパならびに金成マツの語りによる「虎杖丸の曲」、さらに『ユーカラ集3』所収の「小和人」の3編の英雄叙事詩をテキストとし、そこに見られるomommomoという語が使われる場面を整理している。さらに「我」が「つまびらかに述べ」相手は誰かという叙事空間の問題に論は展開している。

この論考では、「この語が現れる場面はいくつかのテーマに限られているようである」と整理されている(荻原 2010:66)。それは「(A) 主人公ポイヤウンベ

の装束、(B) 戦闘、(C) 首領たちとの決闘、(D) 話についてである。端的に言えば、ユカラで繰り返し語られることになる主人公の装束、および闘いの場面を詳述することをomommomoの一語で評する場合が特徴的であり、圧倒的に顕著なのは後者、すなわち闘いについてである」(同前)と、現れる場面が限られていること、特に戦闘場面に多いことを指摘している。

また、omommomoという語が用いられる際に、「斬り合い、打ち合いの状況がこと細かに語られたということがomommomo一語に込められている」(荻原 2010: 68) 一方で、「この一語によって闘いの全容、敵の勇者との個別の戦いなどの描写が簡略化されているということにはなっていない。この一語が挿入された後にも、次の相手との闘いがこまごまとくり返されるのである」(荻原 2010: 69) と、必ずしもすべての状況・描写がomommomo一語に置き換えられているわけではないことについて述べてもいる。

これまでに見た先行文献では、以下のような点が記述されていた。

まず、omommomoの訳としては「省筆」「詳述」が当てられており、この1語によって詳細に述べたことにするという語意の説明があった。

また、omommomoを使って「詳述」することによって、物語のスピードアップをはかったり、同じ事柄がくりかえされる際に2回目以降が省略されるという用法についても説明されている(Philippi 1979; 田村 1998)。ただし、必ずしも具体的な表現が省略されるわけではないという指摘もある(田村 1998; 荻原 2010)。さらに、次の話題に移る際に用いられるという別の用法についても指摘がなされている(田村 1998)。

この語が使用される場面について、荻原(2010)によって戦闘場面など、いくつかに限られていると述べられていることは重要な指摘である。だが、この指摘はごく限られたテキストにおける知見であり、上記のようなomommomoの用法と使用場面との関連性の有無などについての記述はされていない。

そこで本稿においては、荻原(2010)で扱われたテキスト以外を用いることで、omommomoの使用場面の再検討を行い、さらに従来の記述においては散見されてはいるものの、明確にまとめられてはいなかったomommomoの用法についてまとめ、さらには使用場面との関係も含めて検討する。

さらに、先行研究においては、omommomoが使用さ

れるジャンルにかんして、散文説話でiyomommomoという語が「こまごま言わずに」という意味で常套的に使われるという指摘がある(田村 1998)が、ジャンル差についてのそれ以上の説明はされていなかったことから、ジャンル差についても若干の検討を行う。

3 鍋沢元蔵のテキストにおけるomommomoの使用場面

本章以降は沙流川流域に暮らしていた鍋沢元蔵(1886～1967)によるテキストにおけるomommomoの使い方について確認する。

対象としたテキストは門別町郷土史研究会(1965・1969)、ならびに中川・遠藤(2016)に所収の各テキストである。ここには鍋沢元蔵が筆録した英雄叙事詩・聖伝・祈詞・神謡などの口承文学テキストが収められている。このうち、omommomoの用例が見られるジャンルは、英雄叙事詩(63例)と聖伝(13例)のみである。神謡・祈詞のテキストには、omommomoは出てこず、使用されるジャンルに偏りがあると言える⁽²⁾。特に祈詞においては、鍋沢元蔵以外の話者のテキストにおいてもomommomoは用いられず、物語文学にのみ使用される語彙であることがわかる。

前述のとおり、荻原(2010)によると、「虎杖丸の曲」「小和人」では「(A) 主人公ポイヤウンベの装束、(B) 戦闘、(C) 首領たちとの決闘、(D) 話」という各場面で用いられており(荻原 2010: 66)、特に『虎杖丸』の一篇では戦いの場面でもより顕著(荻原 2010: 69)である。

しかし、鍋沢元蔵のテキストにおいては、上記の4パターン以外の場面でもomommomoは使用されている。これを場面・テーマごとに分けると、①冒頭、②装束、③主人公以外の外見、④感情、⑤風景、⑥戦い以外の行動、⑦戦闘、⑧話、⑨くりかえし、⑩結句、となる。それぞれ以下のような場面である。

①冒頭

英雄叙事詩は、主人公である少年英雄が兄あるいは姉に育てられるなどして、山城で平穏に暮らしている様子から始まる。そのような平穏な暮らしをしていたという描写のなかでomommomoが用いられる。この冒頭での用例は、荻原(2010)では使用場面としてあげられていないが、鍋沢元蔵のみならず、平賀サダモのテキストにおいても使われており、田村(1998: 31)では「一

(2) ただし、後述のように、鍋沢元蔵以外のテキストにおいては神謡や散文説話においても、用例数は英雄叙事詩ほど多くはないものの、omommomoが使われる例が確認できる。

つの叙事詩の冒頭の部分にすでに出ている例さえある」と紹介されている⁽³⁾。

Iresu yupi	育ての兄
iresu sapo	育ての姉の
iresu-pa katu	養育したさまを
<u>anomommomo</u> ,	われ詳説する。

(門別町郷土史研究会 1965 : 5)⁽⁴⁾

この用例では、兄や姉がいかに大切に自分を育ててくれたかという描写の代わりにomommomoが用いられている。「詳述」されているその様子というのは、たとえばciararesu / citomteresu / i=ekarkar「丁寧に育てられ、丁寧に育てられ」や、「わが姉 / 良き煮物するのに / 忙しく / 小走りに働く / うす作りの膳に / うす作りの椀を / 立て並べ / われにくれながら」(門別町郷土史研究会 1969 : 261) のように姉がまめまめしく食事を作る様子の常套表現などで語られる。

また、田村(1998 : 31)が「その話題についてはもうこれ以上述べないで、次の話題に移ってしまうとか、終わってしまうとかのときに多く使われる」と指摘しているように、直後に物語の転換が来ることが多い。たとえば、

ramma kane	いつもいつも
katkor kane	変りなく
oka-an katu	暮していたこと
<u>anomommomo</u> ,	物語る。
Oro sinean ta	ある日のこと
onuman ipe	夕飯を
a-e-uru oka	食べ終って
karpaw wa,	しまってから、
akor yupi	私の兄上は
ama sotkihi	寝床へ
o-arpa hine	入って
hokke ruwe ne	寝てしまった

(門別町郷土史研究会 1969 : 463)

という用例では、omommomoの直後にoro sinean ta「ある日のこと」という場面転換において用いられる語句が続く。このあとは、主人公も寝床に入ろうとするが眠ることができずに外に出て行くことになり、そこから物語の本筋が展開する。

このように、ひとつの場面や描写が終わる個所に、～

katu / omommomo「～している様子 / はかくかくしかじかである」が来て、次の行からは新たなる展開が始まるという使い方は、鍋沢元蔵のテキストでは、冒頭以外においても多く確認できる。

②装束

荻原(2010)における「主人公ポイヤウンペの装束」と同様の使い方である。「装束」(hayokpe) そのものの美しさというよりも、「装束する」(hayok) という動作に伴って、この語が用いられている。この点においても、荻原(2010)であげられた用例と、鍋沢元蔵のテキストの用例とは合致している。たとえば、

hayok-an katuhu / <u>anomommomo</u> ,	われ武装したこと / 物語る
---------------------------------------	----------------

(門別町郷土史研究会 1969 : 139)

では、この2行によって、直前で手渡されたと言われている「神の小袖」「掛金つきの帯」「神下しの太刀」「黄金の小笠」という「一揃い」を身につけた様子を「詳説した」ことになる。その様子は、たとえば「神の鎧を / 取って / 足を入れる穴に / 足を通し / 手を入れる穴に / 手を通す。 / 金の小笠を / 頭にかぶり / 笠のあご紐を / ぎゅっと結び、 / 金鎖のベルトを / 一卷きに / 自分の巻き / 神授の刀を / 帯に差す」(中川・遠藤 2016 : 314) のような常套表現で語られる。

ただし、荻原(2010)には「主人公ポイヤウンペの」という限定があるが、鍋沢元蔵のテキストにおいては、

Iresu yupi	育ての兄
iresu sapo	育ての姉
kamuyotopusi	カムイオトプシ
ren ne hine	三人して
hayok katu	武装した様子を
<u>anomommomo</u>	われ語る、

(門別町郷土史研究会 1965 : 37)

のように、主人公のみならず、主人公の兄や姉が装束を身にまとう際にも使われている。ただし、主人公の場合とは異なり、兄や姉の装束や、それを身につける描写は通常、常套表現を用いて丁寧に語られるということはされない。「ニタイパカイエ」という英雄叙事詩には、主人公の実兄たちが「われ装束を着て / われ帯をしめた

(3) 詳細は後述(5章)。

(4) 引用におけるアイヌ語表記ならびに和訳は原著のままである。また、引用文中の傍線は引用者によるものである。以下同様。

「ような姿の者 (imian ruwe / imutan ruwe / nenoanpe)」(門別町郷土史研究会 1969 : 144) のように、主人公と同じような格好をしていることが描かれているが、これ以上に詳しい描写はなされていない。

③主人公以外の外見

前述の「装束」に近いカテゴリではあるが、こちらは身につけるといふ動作ではなく、装束や顔かたちも含めた外見の描写である。

pon menoko / anukar ruwe / tanpa ne pa / sinot numatpo / erik omare / pakno anpe / pon menoko / nan nipeki / hetuk chupne / i-enuchupki / chiwre kanep / kamuy chipanup / eruririkur / raypa kane / kamuy chikiripe / imi kanere / pirka ruwe / akoomommomo.

神姫を / 見ると / 今年あたり / 遊び紐を / 上へあげる / ばかりの / 神姫 / 神の光は / さし出る陽のように / まぶしく輝き / さしている / 神の鉢巻を / 首のつけね高く / まきしめて / 神の刺繍衣を / 上に着て / 美しいこと / われ物語る

(門別町郷土史研究会 1969 : 159-160)

上記では、アエオイナカムイの妹(引用文中ではpon menoko「神姫」と呼ばれている女性)の様子描写において使われている。これは英雄叙事詩において、美しい女性の様子を言う際に用いられる常套的な表現である。

④感情

1例だけではあるが、主人公自身が抱いた気持ちについてomommomoが使われている用例が確認できる。

rawke mina 腹の中では笑って
auwesuye われ面白く思っ
anan katu いたこと
anomonmomo. われ語る。
(門別町郷土史研究会 1965 : 32)

ここもomommomoの直後の行はorowa nesi「それから」という場面転換を表す語が続く(原著ではII章に移る)、主人公が「面白く思っ」ているのは、omommomoの行までとなっている。

⑤風景

描写としては、人物以外にも風景、特に主人公が暮らしている山城の様子についても、omommomoが用いられる。

tanepo tapne 今をはじめて
akor chasi わが城の
soyke sama 庭先で
ayayamkire われ自ら眺める
akor chasi わが城の
pirka ruwe 美しいこと
anommomo. われ語る。
(門別町郷土史研究会 1969 : 181)

山城については、「古く立つ柵は / 柵がゆがみ / 新しく立つ柵は / 柵が真直に / なっている」(門別町郷土史研究会 1965 : 13) のように、新しい柵・古い柵といった周辺の様子などを事細かに並べる場合もあるが、ここではそういった常套表現に代わってomommomoが使われている。

⑥戦い以外の行動

人物や風景などの外観の描写だけではなく、主人公自身の行動についても、omommomoが用いられる。

荻原(2010)では、omommomoは特に戦闘における行動についての表現との関係性が密であることが指摘されているが、鍋沢元蔵のテキストにおける表現では、必ずしもそうではない。逆に、戦いに関するものではなく、山城にいるときや、戦闘と戦闘の間という平穏時における行為についてomommomoが用いられていることが特徴である。しかしながら、どのような行動にでもomommomoが用いられるのではなく、「寝る」「食べる」「腰を下ろす」「(移動のために)空に飛びあがる」などに限定されている。たとえば、以下のようなものがある。

ipe-an katuhu われ食事をしたこと
anommomo 物語る。
(門別町郷土史研究会 1969 : 182)

kane amset 黄金の寝台
amset kurka 寝台の上に
akoyayosura 身を投げて
hokke-an katuhu 臥したこと
aommomo. われ語る。
(門別町郷土史研究会 1969 : 182)

kamuy maw sirka 神風の上に
a-i-ekosne kur われ軽々と
suypa kane 揺られながら
arakuwanno 一直線に
rikinan katuhu 天空に昇ったこと

anomommomo. 例の如くである。
(門別町郷土史研究会 1969 : 278)

am samam-ni 地べたの倒れ木
samam-ni kurka 倒れ木の上に
an osorus 腰かけて
oka-an katuhu 居たこと
anomommomo. 例の如くである。
(門別町郷土史研究会 1969 : 595)

②装束、③主人公以外の外見、④風景という外見描写については、それぞれ常套句が用いられることが多い場面での使用であった。しかし、ここにあげたような行動については、omommomoが使われない場合にも、これといった常套表現で詳しい描写がされることはない⁽⁵⁾。たとえば、上記のように倒れ木に腰を下ろす際には、

am-samam-ni 地べたの倒れ木
samam-ni kurka 木の上に
a-o-osorus われ腰を下して
anan awa いたら
iteksamake わが傍へ
chikurre wa, 人の影がして、
(門別町郷土史研究会 1969 : 192)

のように語られる。omommomoが使われる場合と使われない場合とでは同じ表現が使われており、後者で特に詳しい描写がなされているということはない。

にもかかわらず、ここでomommomoが用いられている理由としては、ひとつの場面や描写が終わる個所にあたることと、描写そのものとしては常套表現が使われるモチーフではないが、「寝る」「(木に)腰を下ろす」「(移動のために)飛び上がる」などは、英雄叙事詩においてよく出てくるモチーフ(行為)であることが関係しているものと考えられる。

⑦戦闘

荻原(2010:69)ではomommomoが使われる場面として、『虎杖丸』の一篇では戦いの場面でより顕著とされているが、鍋沢元蔵のテキストにおける、戦いの最中のomommomoの使用は、下記の1例のみである。

kina oro tuye 野草を切る如く
a-ekarkara katu 切り倒したこと
anomommomo. われ語る。
(門別町郷土史研究会 1965 : 54)

これは敵の村人たちを主人公が薙ぎ斬る場面である。直前には人びとが多くいる様子が語られる。また、この直後では、引き続き敵の軍勢を主人公が斬りまくる様子が、表現を変えて語られている。このように、戦いの場面においてomommomoが使用される場合には、直後に場面や描写が終了せずに、そのまま戦いの描写が続いている。

⑧話

荻原(2010)における「(D)話」に該当するもので、鍋沢元蔵のテキストでは、次のような用例が確認できる。

Perane mosir ヘラネ国の
ekotan kor kur 首領の
kor turesihi 妹が
sinuma patek 一人だけ
ikasuy katuhu 助だちしてくれたのだ』と
anomommomo われ詳説した
(門別町郷土史研究会 1969 : 327-328)

ここは主人公による発話で、冒頭で離ればなれになって、最後にようやく再会した養い姉に対して、これまで自分がどのような目にあっていたのかを説明している場面である。登場人物が他の登場人物に対して発話を行う際に、その締めとして、omommomoが使われている。

したがって、ここではitak「話す」やhawean「言う」のように、主人公の発話行為そのものを表す動詞として使われている。

⑨くりかえし

omommomoの語義あるいは説明として、金田一(1931:451)には「詞曲では前述したことを再び絮説することを省く時に a-omommomo(我絮説す)と云つてのけて省略す」とある。すなわち、ストーリー中で既に語られた事柄がくりかえされるときに、omommomoが使われるという説明である。また、田村(1998:31)でも「同じ事柄が繰り返されるときに、2回目以降、詳

(5) ここでは、門別町郷土史研究会(1969:595)の例においてomommomoが「詳述」している内容は「腰を下ろす」という行動だけだと解釈したが、omommomoが「詳述」している内容についての範囲指定は明示されていないため、「腰を下ろす」という直前の行動だけではなく、さらに前の「seta kikir / uasuraste / a-ekeske kar 犬虫ども / 評判立たせるもの / われ斬り捨てた」という常套句を含む戦闘場面全体だという可能性も考えられる。このような、omommomoが「詳述」している範囲についての考察は稿を改めて行う必要があるが、本稿においては、②装束、③主人公以外の外見など、他の分類における使い方においても、2つ以上の動作・描写を指し示している例が見られないことから、omommomoは直前にある行為(モチーフ)のみを受け、「戦闘場面」のような大きなテーマやシーンを指しているものではないとした。

述を省略するとき」に用いられるとある。このように、語り手・聞き手の間で決まりきった表現・描写として了解されている常套表現だけでなく、ストーリー中で「前述したこと」に対して用いられるという使い方も、omommomoにはある。

荻原（2010：68）ではこのカテゴリは立てられていないが、「首領たちとの決闘」において、「弟の次には、……その兄との闘いになり、同じような斬り合い、打ち合いの状況」がくりかえされる際にomommomoの一語でその状況を語ったことにすると説明されている。そのため、「首領たちとの決闘」は、単に常套的な戦闘の描写をomommomoで言い換えるのではなく、何人もの首領との戦いが続く際に、2人目、3人目の戦いにおいて、「前と同じように戦った」とくりかえしにあたる部分で使われていると考えられる。

戦闘以外においてであれば、鍋沢元蔵のテキストでも、主人公が同じ行為をくりかえす際にomommomoが用いられる例は確認できる。

Pakno nekor	それから
ape-teksam ta	炉ばたで
wenkur apekur	下人の様を
ahorka suye	われ真似して
anan katu	いた有様を
<u>anomommomo.</u>	われ語る。

(門別町郷土史研究会 1965：43)

これは、敵対者が主人公の持つ黄金のラッコを盗むためにやってくるのを、主人公が「下人」の格好（＝変装）をして待ちかまえている場面である。この場面は、3人の敵対者を相手に3回同じ行為がくりかえされる。すなわち、下人の格好をして敵対者の襲撃を待ち、敵が現れるや元の装束に戻って敵を討つ、という一連の流れを3回くりかえす。上に引用したものは、その3回目にあたる。このように、ストーリー中ですでに語られた行為を同じようにくりかえす際に、それをomommomoで置き換えるという表現も見られる。

しかし、この使い方の用例はそれほど多くはない。同じ場面や行為がくりかえされる際に、そのまま描写を省略せずに、同じ表現をそのままくりかえすことが口承文芸においては少なくないためである。そのため、「くりかえし」の用法にあたるものは、ここにあげた、3人の敵対者の襲撃を迎え撃つという、「kutune sirka」（「虎杖丸の曲」）の一場面集中している。

なお、動作自体が同じものであっても、動作主が逆転する「仕返し」「やり返し」の場合は、「くりかえし」とは異なり、omommomoという語では表されない。たと

えば、敵対者との戦闘において、

annukippo	彼がしたとおりに
a=emontasa	私は仕返す。

(中川・遠藤 2016：247)

という表現が見られる。ここでは「下を通る太刀影は / 飛び散る炎のように / 上を通る太刀影は / 舞い上がる炎のように / 炎を燃やして / 私を追う」（同前）という、直前に敵対者が行った攻撃を、主人公が同じようにやり返している様子をこの2行で表している。このように、同じ動作ではあっても動作主が異なる場合にはomommomoは使われない。したがって、omommomoが「くりかえし」において用いられるのは、同一の動作主が同じ動作を行うという、まったく同一のモチーフが反復される場合に限られると言える。

⑩結句

鍋沢元蔵の英雄叙事詩においては、戦闘場面よりも、主人公が自分の山城で平穏に暮らしている場面においてomommomoが使われることが多い。そして、戦いを終えて山城に戻って来た主人公が、平穏に暮らす様子について、

pakno nekor	それから
akor am-set	わが寝台
am-set kurka	寝台の上に
akoyayosura	われ身を投げて
hokke-an katu	臥したこと
<u>anomommomo.</u>	われ物語った。

(門別町郷土史研究会 1969：202)

のように語って終わる場合が、鍋沢元蔵の英雄叙事詩には少なくない。すなわち、物語の最後の1文にomommomoが来る用例である。こうした終わり方は、他の語り手のテキストでは、ほとんど見られないパターンであり、鍋沢元蔵の表現の特徴と言える。

上記のパターンを、荻原（2010）において分類されたパターンと比較すると、以下の表ようになる。

表1 omommomoが使われる場面

	鍋沢ワカルバ「虎杖丸」 金成イメカヌ「虎杖丸」 「小和人」 (荻原 (2010) より)	鍋沢元蔵 (英雄 叙事詩・聖伝)
①冒頭	—	17
②装束	3	11
③主人公以外の外見	—	3
④感情	—	1
⑤風景	—	3
⑥戦い以外の行動	—	31
⑦戦闘	2	1
首領たちとの決闘	6	—
⑧話	2	1
⑨くりかえし	—	3
⑩結句	—	5
計	14	76

②装束についての描写においてよく使われているのは両者に共通する特徴である。主人公の装束は「小袖 (コソソデ)、刀、帯、兜など」(荻原 2010 : 66) によって構成され、これを身につける様子は常套的な表現で語られる。

鍋沢元蔵のテキストで特に顕著なのは、①冒頭と⑥戦い以外の行動における使用が多いことである。一方で、「虎杖丸」において顕著である⑦戦闘にかんしてはほとんど使用されていない。

以上のように、荻原 (2010) で報告されたomommomoの使用場面と、鍋沢元蔵のテキストにおけるそれとは、大きく異なっている。その違いの理由について考察するため、以下ではさらにomommomoの使い方を詳しく見ていく。

4 鍋沢元蔵のテキストにおける omommomoの用法

鍋沢元蔵の用例をみていくと、omommomoが使われる場合には、いくつかのパターンが見られることがわかる。それは、大きく分けて、

- (1) 常套的な描写・行為
 - (2) 先にストーリー中で語られた出来事をくりかえす場合
 - (3) 発話動詞としての用法
- である。

このうち、(1) は、たとえば装束や山城の様子などを描写するなどの常套表現と対応する場合である。この常套表現は、ストーリーそのものとは直接関係がない、事物や人物の描写であることが多い。このパターンが用法としては多く、3章であげた分類における①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑩が該当する。

一方、(2) で丁寧に詳述する内容は、ストーリーに直結するという点において (1) とは異なる。ここでは、

ストーリー中で既に語られた内容・行為がくりかえし出てくる場合の用法である。3章であげた分類における⑨くりかえしが該当する。

そして、(1) (2) はいずれも、「次の話題に移ってしまうとか、終わってしまうとかのとき」(田村 1998 : 31) に使われることが多い。

(3) は、登場人物から別の登場人物への発話行為としてomommomoが使われている用法である。そのため、omommomoが指示する内容は、登場人物のせりふになる。3章であげた分類における⑧話が該当する。

そして (1) については、さらにいくつかのパターンが確認できる。

前述の

hayok-an katuhu われ武装したこと

anomommomo. 物語る

(門別町郷土史研究会 1969 : 139)

では、この2行によって、たとえば「神の鎧を / 取って / 足を入れる穴に / 足を通し / 手を入れる穴に / 手を通す。 / 金の小笠を / 頭にかぶり / 笠の垂れ紐を / ぎゅつと結んだ。 / 金鎖のベルトを / ただ一卷きに / 自分の身体に巻き / 神授の刀を / 帯に差す」(中川・遠藤 2016 : 314) といった常套表現を述べたことと同様だということになる。

omommomoの語義としてあげられる、「一々につまびらかに叙説する意。省筆するときという慣用語」(金田一 1931 : 99) や「詳しく描写しなければならないような場面を、アオモンモモ a=omommomo『私は詳しく述べる』とだけ言って省略してしまう用法」(中川 1995 : 130) という説明はこのような用法を念頭に置いたものと考えられる。

しかし、必ずしもomommomoの一語のために「くわしく述べるようなこと」が「省略」されているわけではない。たとえば、

pon menoko / anukar ruwe / tanpa ne pa / sinot numatpo / erik omare / pakno anpe / pon menoko / nan nipeki / hetuk chupne / i-enuchupki / chiwre kanep / kamuy chipanup / erurikikur / raypa kane / kamuy chikiripe / imi kanere / pirka ruwe / akoomommomo.

神姫を / 見ると / 今年あたり / 遊び紐を / 上へあげる / ばかりの / 神姫 / 神の光は / さし出る陽のように / まぶしく輝き / さしている / 神の鉢巻を / 首のつけね高く / まきしめて / 神の刺繍衣を / 上に着て / 美しいこと / われ物語る

(門別町郷土史研究会 1969: 159-160)

という用例においては、koomommomoの前に、すでに pon menoko 「神姫」の様子が詳しく描写されている。初めて目にした女性の、年頃（「今年あたり遊び紐を上へあげる」）、顔の美しさ（「陽のようにまぶしく輝き」）、服装（鉢巻、刺繍衣）について述べるのは、英雄叙事詩においてヒロイン・女勇者を描写する際の常套的な表現である。

前述の「省筆するときという」（金田一 1931: 99）のような用法であれば、これらの描写と置き換わる位置にomommomoが来て、たとえば、

pon menoko / a=nukar ruwe / a=koomommomo
神姫を / 見たこと（見た様子） / われ物語る⁽⁶⁾

のようになることが予想される。しかし、鍋沢元蔵のテキストにおいては、こうした置き換わるべき詳しい描写が省略されず、描写が語られた後でomommomoが付される例が少なくない。

また、鍋沢ワカルパの「虎杖丸の曲」では、「この句のあとに、84行にわたって詳述のつづいている箇所（3216-99）、27行にわたって続いている箇所（5909-35）もある」（田村 1998: 31）ように、描写がomommomoの後ろに続く例もある。いずれも、必ずしもomommomoで「詳述」しているはずの描写がomommomo一語に置き換わっていない例である。

さらには、通常は常套表現がなく、そもそも「詳述」するような描写が語られないような行為について、

am samam-ni	地べたの倒れ木
samam-ni kurka	倒れ木の上に
an osorus	腰かけて
oka-an katuhu	居たこと
<u>anomommomo.</u>	例の如くである。

(門別町郷土史研究会 1969: 595)

とomommomoが用いられる例が、鍋沢元蔵のテキストでは、しばしば見られる。

このような「腰かける」行為自体は、英雄叙事詩では戦闘が一段落した際に非常によく出てくる行為である。しかし、その具体的な様子についての詳しい描写や常套表現などは、他のテキストにおいても見受けられない。この場合、「腰かける」様子の常套表現はいずれのテキストにおいても顕在化していないものの、潜在的には

『くわしく述べるようなことがあるのだ』（田村 1998: 31）と考えられていたために、omommomoがここで使われたという推測も可能である。しかし前述のように、omommomoが常套表現と併置されることから、omommomoが使われる場合、必ずしも詳しい描写・詳しい常套表現と置き換わらねばならないわけではない。そのため、潜在的な常套表現と置き換わったと考えるよりも、テキストどおりに、常套表現が使われない場面においても、omommomoは使われるものと考えられる。その場合、omommomoはこれまで記述されていたような常套表現との置き換わり・省略のためとしてではなく、使われていることになる。

したがって、この場合、「くわしく述べる」というより、単純に以上のようなことがあったと「物語った（物語る）」あるいはここにあげた用例の訳のように「例の如くである」という意味合いとして用いていたと解釈できる。「倒れ木に腰かける」「寝る」「（移動のために）空に飛び上がる」などの、英雄叙事詩ではよく見られる表現についてのみ使われることから、単に「このようなことをした様子 (katu) を物語った」というよりも、「このようなことをした様子 (katu) は、いつも（他の英雄叙事詩にも出てくる）とおりでである」という「語り手と聞き手との間の、習慣化された、いわば約束事」（田村 1998: 31）を標示するためにomommomoが使われていると考える。

さらには、常套表現と併置されたり、常套表現が使われない場面において使われたりするomommomoの場合は、「くわしく述べる」ためというよりも「次の話題に移ってしまうとか、終わってしまうとかのとき」（田村 1998: 31）であるために使われているという意味合いもあるだろう。

すなわち、(1) 常套的な描写・行為 の場合には、
(A) 常套表現の置き換え（常套表現の省略）
(B) 常套表現と置き換わらない（常套表現との併置）
(C) 常套表現と置き換わらない（常套表現が使われない場合）

という3つのパターンが確認できる。

鍋沢元蔵のテキストにおいては、(B) (C) のように、omommomoを「描写の詳述の置き換え」としてではない用例が顕著であることが特徴である。

また、前述のとおり、鍋沢元蔵は物語の冒頭や結句においてomommomoを用いることが多いが、ここもまた冒頭からストーリー本編への移行や物語終了という「次の話題に移ってしまうとか、終わってしまうとかのとき」であるために、多く見られるものと考えられる。

(6) 筆者による作例。

以上をまとめると、鍋沢元蔵のテキストにおけるomommomoの使い方としては、

- (1) 常套的な描写・行為
 - (A) 常套表現の置き換え（常套表現の省略）
 - (B) 常套表現と置き換わらない（常套表現との併置）
 - (C) 常套表現と置き換わらない（常套表現が使われない場合）
- (2) 先にストーリー内で語られた出来事をくりかえす場合
- (3) 発話動詞としての用法と分類することができる。

前節で確認した①～⑩までのomommomoが用いられる場面について、(1)～(3)の用法のうち、それぞれの使い方が多いのかを一覧にしてみると、表2のようになる⁷⁾。

表2 「虎杖丸」と鍋沢元蔵テキストのomommomo使用場面と用法

	鍋沢ワカルバ「虎杖丸」 金成マツ「虎杖丸」 「小和人」 (荻原(2010)より)	鍋沢元蔵(英雄叙事詩・聖伝)
①冒頭	—	常套表現の置き換え(1-A) 常套表現との併置(1-B)
②装束	常套表現の置き換え(1-A)	常套表現の置き換え(1-A) (主人公) 常套表現が使われない(1-C) (主人公以外)
③主人公以外の外見	—	常套表現の置き換え(1-A) 常套表現との併置(1-B)
④感情	—	常套表現との併置(1-B)
⑤風景	—	常套表現との併置(1-B)
⑥戦い以外の行動	—	常套表現との併置(1-B) 常套表現が使われない(1-C)
⑦戦闘	常套表現の置き換え(1-A)	常套表現の置き換え(1-A)
⑧首領たちとの決闘	くりかえし(2)	—
⑨話について	発話動詞(3)	発話動詞(3)
⑩くりかえし	くりかえし(2)	くりかえし(2)
⑩結句	—	常套表現との併置(1-B) 常套表現が使われない(1-C)

「虎杖丸」においては、常套表現と置き換わらない用例(1-B、1-C)が見られないことが鍋沢元蔵のテキストとの違いとしてあげられる。そのため、鍋沢元蔵のテキストにおける用法と比べると、かなり限定された用法だと言える。そして、鍋沢元蔵のテキストにおいてのみomommomoが使われる場面の多くは、⑥戦い以外の行動のように、常套表現と置き換わらない場合(1-B、1-C)である。

したがって、鍋沢元蔵のテキストと「虎杖丸」との間で、omommomoが確認できる場面に差異が見られるのは、omommomoの用法の広狭に起因すると考えられる。

5 英雄叙事詩・聖伝におけるomommomoの使用

前章では、omommomoが使われる場面ならびに用法が、鍋沢元蔵のテキストにおいては、荻原(2010)で示されているものよりも広いことを指摘した。

こうした使用場面・用法の広狭が鍋沢元蔵独自の特徴であるのかについて検討するため、鍋沢元蔵と同じ沙流地方の英雄叙事詩・聖伝のテキストにおけるomommomoの使用場面について概観する。

萱野(1998)、金田一(1968・1975)、田村(1991-1998)、北海道教育庁生涯学習部文化課(1988-1992)、久保寺(1977)所収の英雄叙事詩ならびに聖伝について、omommomoが出てくる用例(全78例)を、上記で分類した使用場面ごとに分類すると、以下のようになる⁸⁾。

①冒頭：11例

(二谷一太郎(1例)、平賀サダモ(8例)、鳩沢ワテケ(1例)、鍋沢ワカルバ(1例))

②装束：12例

(平賀サダモ(1例)、二谷一太郎(1例)、平賀ヤヤシ(2例)、鳩沢ワテケ(1例)、鍋沢ワカルバ(1例)、平賀エテノア(4例)、平目カレピア(2例))

③主人公以外の外見：4例

(二谷一太郎(1例)、鳩沢ワテケ(2例)、鍋沢ワカルバ(2例))

④感情：1例

(二谷一太郎(1例))

⑤風景：8例

(平賀ヤヤシ(1例)、平賀サダモ(3例)、鍋沢ワカルバ(3例)、平賀エテノア(2例))

(7) ここでの「常套表現」は、鍋沢元蔵のテキストに見られる表現ならびに、白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室(2005)の「金成ユーカラ常套表現の型および原文対訳と語源分解」を参考にしたが、フォーミュラ研究に基づくアイヌ英雄叙事詩の常套表現一覧に相当するものが現時点ではないため、本表における常套表現の取捨は筆者による恣意的な選択となっている部分もあると考えられる。そのため本表は正確なデータとしてではなく、おおよその傾向として提示するものである。

(8) 以下、カッコ内の人物名は、各テキストの語り手を表す。

⑥戦い以外の行動：21例

(二谷一太郎 (6例)、平賀ヤヤシ (1例)、平賀サダモ (3例)、鳩沢ワテケ (4例)、鍋沢ワカルパ (6例)、平賀エテノア (1例))

⑦戦闘：15例

(鳩沢ワテケ (2例)、二谷一太郎 (1例)、平賀ヤヤシ (1例)、鍋沢ワカルパ (7例)、平賀エテノア (4例))

首領たちとの決闘：4例

(鍋沢ワカルパ (4例))

⑧話：なし

⑨くりかえし：1例

(平賀ヤヤシ (1例))

⑩結句：1例

(平賀サダモ (1例))

まず、①冒頭や⑥戦い以外の行動における用例が多いことなどから、全体としては前節で確認したうち、「虎杖丸」よりも鍋沢元蔵における用例に近い分布となっていることがわかる。

また、金田一 (1968・1975) 所収の鍋沢ワカルパのテキストでも①冒頭や⑥戦い以外の行動での使用例が確認できる。そのため、同じ鍋沢ワカルパの語りによる「虎杖丸」に見られる使用法のように「主人公の装束、および闘いの場面を詳述」(荻原 2010: 66) するばかりではなく、それ以外の場面についても広く使われている。

以上のことから、沙流地方の英雄叙事詩・聖伝テキストにおいては、鍋沢元蔵のテキストに見られたように、荻原 (2010) で指摘されていた使用場面よりも多くの場面で使われると言える。

個々の場面について見ていくと、⑦戦闘においてomommomoを使用しているのは、特に鍋沢ワカルパのテキストで多く見られる。特に首領たちとの戦闘において用いているのは、鍋沢ワカルパのみであり、戦闘場面においてomommomoを多く使うのは、鍋沢ワカルパの語りの特徴だと言える。

また、⑩結句については、平賀サダモの語りで1例確認できるとどまる。鍋沢元蔵が5編の英雄叙事詩の結句においてomommomoを使っているのは、これらのテキストと比べると有意に大きい値であり、結句においてomommomoを用いるのは、鍋沢元蔵の語りのひとつの特徴だと言える。

したがって、omommomoが使われる場面については、ある程度パターンが決まっており、それは沙流地方においては個人差や世代による差は確認できない。しかし、omommomoが使用しうる場面で特にどこで多く用いる

かは、語り手個人によって差異があり、それがそれぞれの語りの特徴にもなっている。

6 神謡における使用 (1)

ここまでに見たようにomommomoという語は英雄叙事詩・聖伝において、よく用いられる語だが、同じ韻文の神謡においても用例は確認できる。以下では、これまでの議論において提示した分類を用いながら、ジャンルの違いによる用法の差異の有無について、若干の検討を試みる。

沙流地方の神謡が採録されている久保寺 (1977) では、106編の神謡のなかに②装束が1例、⑤風景が2例、⑦戦闘が1例、がそれぞれ確認できる。英雄叙事詩と比べると、出現頻度は神謡のほうが低い。

また、同じ沙流地方の神謡が収録されている萱野 (1998) 所収の23編の神謡には、omommomoの使用例が確認できない。これは神謡における使用頻度が低いため、この23編中にはたまたま見られなかったためかとも考えられるが、あるいは世代差によるもので、神謡では徐々にomommomoが使われなくなっていったという可能性もあるだろう。

用法としては、

kamui-kat chashi 神の作った山城で
pirka katu その宏麗な様は
a-ko-omommomo, 詳しく述べるまでもないが、
(久保寺 1977: 462 (平目カレピア))

という常套表現を置き換える (1-A) という用法にとどまっている。そのため、英雄叙事詩・聖伝と使用場面・用法は同じではあるが、その用法はごく限られていると言える。

7 神謡における使用 (2) 『アイヌ神謡集』におけるomommomo

6章で見たテキストのほかに、omommomoが使われている神謡のテキストのひとつとして、知里幸恵 (1903～1922) による『アイヌ神謡集』がある。

『アイヌ神謡集』中に確認できるomommomoの用例は4例であるが、いずれも沙流地方の神謡におけるomommomoの用法とは異なる傾向にある。

前章において確認したように、神謡においてもomommomoは使用される。ただし、沙流地方の神謡においては、(1-A) 常套表現を置き換えるという用法が、②装束、⑤風景、⑦戦闘において、使われるのみであっ

表3 『アイヌ神謡集』におけるomommomo

テキスト	出版されたテキスト (『岩波文庫』)	ノート版 (知里・北道 (2000))
「梟の神の自ら歌った謡」	eneshirkii chiomommomo ko 「その村の状況、その出来事を詳しく話しますと」 (知里 1978 : 32)	記述なし
「梟の神が自ら歌った謡」	Yukkor Kamui / Chepkor Kamui hawokai katuhu omommomo. 「鹿の神と / 魚の神が言ったという事を詳しく申し立てた」 (知里 1978 : 102)	Yukkokamuy / Cepkorkamuy / ye ruwe ne / ari an pe / Katken-okkayo / ecaranke, 「鹿の神様も魚の神様も / 言ったと、いう事を / カッケンの若者が話をした」 (知里・北道 2000 : 81)
「海の神が自ら歌った謡」	Otasut kotan kotankor nishpa kor utari / opittano kotchakene unkoyairaike katuhu / omommomo 「オタシュツ村の村長が村民 / 一同を代表して私に礼をのべる / 次第をくわしく話し」 (知里 1978 : 118)	Otasut un / kotankor nispa / kotan epittaokay / utar kotcake ne wa / un=koyayrayke katu 「オタシュツ村の村長が / 村中の人たちを / 代表して / 私に感謝するというのです」 (知里・北道 2000 : 94)
「海の神が自ら歌った謡」	Otashut kotan / kotankor nishpa eneene ukoyairaike wa / kikeushpashui sonkokor wa ek katuhu / chiomommomo 「オタシュツ村の村長が斯々の言葉をとって私に礼にのべ / 幣つきの酒箸が使者になって来た事など / 詳しく物語ると」 (知里 1978 : 124)	Otasut un / Kotankor Nispa / ene ene /yayrayke wa / Kikeus pasuy / sonko kor katu / sieysoytak / ci=ecaranke ko 「オタシュツ村の村長が / 斯然然の言葉をもって私に感謝し / キケウシパスイが / 使いに来たありさまを / 物語りますと」 (知里・北道 2000 : 98)

た。しかし、『アイヌ神謡集』においては、「eneshirkii chiomommomo ko その村の状況、その出来事を詳しく話しますと」(知里 1978 : 32) のように、(3) 発話動詞としての用法のみが見られる。このような用法の差異は、地域差に起因し、知里幸恵の生育地である幌別においては、沙流地方とは異なる用法であるという可能性が考えられる。

ただし、知里幸恵による草稿段階⁽⁹⁾のバージョンにおいてはomommomoという語彙が用いられておらず、該当箇所においては別の語が用いられていることに注目したい(表3参照)。すなわち、確認できる4例のomommomoはいずれも出版されたバージョンにおいて差し替えられた語彙ということになる。このことから、一概に地域差による差異だとは言えないのではないだろうか。

知里幸恵がomommomoに差し替える前の語はecaranke「～について議論する」、koyayrayke「～に対して感謝する」、sieysoytak「自身について語る」である。いずれも、登場人物が何かを語った(発話した)直後に、それをまとめるような個所で使われており、これまでの分類でいう(3)発話動詞にあたる。そのため、ここではある発話動詞を別の発話動詞に差し替えるにあたって、omommomoという語が選択されたと言える。

このように、沙流地方の神謡としてはイレギュラーな用法である(3)発話動詞としての用法が『アイヌ神謡集』に見られるのは、幌別地方の伝承がストレートに反映された結果というよりも、知里幸恵による意図が多分に反映された結果であると考えられる。

8 散文説話における使用

散文説話におけるomommomoについて、田村(1998 : 31)では「民話(uwepekerウエペケレ 物語)ではよく、訪問者が来たときに取り次ぎの女性が「これこれこういうふうな人が来ています」と告げる言葉を聞いた家の主が、「こまごまと言わずに、入りたくて来た人は家に入れなさい」というような意味の常套表現の中で、この語の入ったiyomommomo [i-omommomo ものごと・をこまごまという]という語が使われる」と、登場人物がストーリー内で発話した内容を指す例が紹介されている。

このような⑧話にあたる用法は、英雄叙事詩のなかでも見られるものではあったが、その占める割合はさほど大きくはない。

だが、散文説話においては、

somo iyomonmomo no ka hokure un=ahunke
sekor kane hawas hawe an hine

「よけいなことを言わずに、さっさとお客を入れなさい」と、女を叱っている声が聞こえました。

(萱野 1998 : 5巻106)

などのように、田村の指摘どおり、omommomoはiomommomoという語形で、発話の内容を示す用例のみが確認でき、その他の用法は見られない。そのため、韻文である英雄叙事詩・神謡と散文説話とは、その用

(9) 本稿では知里・北道(2000)をテキストとした。

法に違いがあると言える。

9 おわりに

以上、鍋沢元蔵のテキストと「虎杖丸」におけるomommomoの使われる場面ならびに用法について検討し、沙流地方におけるテキストでの使用場面について概観した。その結果、荻原(2010)で提示されたよりもomommomoが使用される場面が実際には広いことを指摘した。

しかしながら、常套的な表現が使われる場面であれば、どこでも自由にomommomoを用いるわけではない。たとえくりかえしであっても、自分の身の上に起きたことを別の登場人物に物語る際には「tapne tapne / newa tapne / ekan katuhu/ ne ruwene かよう、しかじか / なのですから / ここまで来たもの / なのです」(門別町郷土史研究会 1969: 508)とtapne tapneを使用するように、くりかえしや省略にはomommomo以外の語句を使うこともあり、すべてのくりかえしや省略がomommomoによって行われるわけではない。

また、omommomo自体の意味としては「詳述する」「かくかくしかじかである」だが、語り方そのものとしては、「この語を用いながら、実際は詳細には述べず、かえって省略することが多い」(久保寺 1977: 667)のように、丁寧な描写を1語に縮約あるいは省略しているということになることは前述のとおりである。そのため、テンポよくストーリーが進むような語りにおいては、omommomoなどによる省略は多くなり、逆にゆったりと丁寧に語る際には省略が少なく、常套表現による描写や行為・行動あるいはモチーフのくりかえしが多くなることが予想される。これは、単に神謡は英雄叙事詩と比して短いためにストーリーのテンポが速いという、ジャンル差の問題だけではない。

たとえば、久保寺(1977)では、平目カレピアの語りについて「エテナア嬢に比して、遙かに……筋の運びが早い」(久保寺 1977: iii)という、伝承者によって「それぞれ特質長短があり、個人差が見られ」る様子について概説している。こうした語り手それぞれの語り方の特徴でもあり、さらには同じ語り手の話ではあっても、聞き手の顔ぶれ・態度も含めた場によっても、省略(あるいはくりかえし)の多寡は変化する。

こうした個々の語り手の文体を特徴づける要素のひとつとして省略(あるいは「くりかえし」)を考える際には、omommomoのみならずtapne tapne「かくかくしかじか」などの語句も含め、それらの用法や頻度がどのように関わってくるのかの検討が必要になるが、それについては今後の課題としたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、査読の諸先生より貴重な御意見・御指摘を頂戴したことに對し、記して感謝申し上げます。

引用文献

- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編 1994. [縮刷版]日本昔話事典. 弘文堂.
- 荻原眞子 2010. Aomommomo(我つまびらかに述ぶ)について——アイヌ叙事詩ユカラの「一人称」叙述に寄せて——. 口承文芸研究 33: 日本口承文芸学会.
- 萱野茂録音・編著 1998. 萱野茂のアイヌ神話集成(全10巻). ビクターエンタテインメント/平凡社.
- 萱野茂 2002. 萱野茂のアイヌ語辞典(増補版). 三省堂.
- 金田一京助 1923. アイヌ聖典. 金田一京助全集編集委員会編 1993. 金田一京助全集 第11巻 アイヌ文学V. 三省堂.
- 金田一京助 1931. アイヌの叙事詩 ユーカラの研究. 東洋文庫. 金田一京助全集編集委員会編 1993. 金田一京助全集 第9巻 アイヌ文学III. 三省堂.
- 金田一京助筆録・訳注. 1968. ユーカラ集VIII. 三省堂.
- 金田一京助筆録・訳注 1975. ユーカラ集IX. 三省堂.
- 久保寺逸彦 1977. アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究. 岩波書店.
- 久保寺逸彦 1992. アイヌ語・日本語辞典稿. 北海道教育委員会.
- 佐藤知己 2004. 知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と特異な言語事例をめぐって. 北海道立アイヌ民族研究センター研究紀要 10. 北海道立アイヌ民族研究センター
- 白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室 2005. 金成マツ筆録ユーカラ既刊20編の研究と分析. 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告 5.
- 田村すゞ子 1991-1998. アイヌ語音声資料7~11. 早稲田大学語学教育研究所.
- 知里幸恵 1978. アイヌ神謡集. 岩波文庫.
- 知里幸恵著 / 北道邦彦編・発行 2000. ノート版 アイヌ神謡集 [改訂版].
- 戸谷高明 2000. 古事記の表現論的研究. 新典社.
- 中川裕 1995. アイヌ語千歳方言辞典. 草風館.
- 中川裕・遠藤志保 2016. 国立民族学博物館調査報告134 国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵ノートの研究. 国立民族学博物館
- Philippi, Donald L., 1979, *Songs of gods, songs of humans: the epic tradition of the Ainu*. University of Tokyo Press.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998-1992. アイヌ語民俗文化財調査報告書(口承文芸シリーズV~X) 久保寺逸彦ノート(全5巻). 北海道教育委員会.
- 門別町郷土史研究会編 / 鍋沢元蔵筆録 / 扇谷昌康訳注1965. アイヌ叙事詩 クドネシリカ.
- 門別町郷土史研究会編 / 鍋沢元蔵筆録 / 扇谷昌康訳注1969. アイヌの叙事詩.

A Study of the *Omommomo* Expression That Used in the Ainu Oral Literature:

Focusing on Heroic Epics in Saru

Shiho ENDO

I analyzed the scenes and ways in which *omommomo* ("to explain in detail") – one of the expressions often used in Ainu heroic epics – is used, particularly in the texts of Mr. NABESAWA Motozo, a Saru dialect speaker.

First, an overview of the scenes in which *omommomo* is used in the oral literature of the Saru dialect, particularly in the texts of Mr. NABESAWA. The results indicate that *omommomo* is used in more scenes than indicated in previous studies.

Next, discussions regarding the method of use of *omommomo* indicated that there are multiple methods of use and not just in cases to substitute formulas.

In addition, the method of use was considered in genres other than heroic epics, and although the scenes and methods in which the term is used in mythic epics are the same as in heroic epics, the scenes and methods in which they are used differ in prose tales.